

すべては命のために

(原文)

的場 由晏 (14 歳)

東京都

晃華学園中学校

小学校3年生の頃、私は鯉を飼っていた。「鯉太郎」と名付けられたその鯉は、いとこ達と一緒にいった夏祭りで、「金魚すくい」ならぬ「鯉すくい」で私にすくわれた。「こういう所の生き物は長生きしないから。」とあまりいい顔をしない母を「どうしても家に連れて帰りたい。ちゃんとお世話をするから。」と説得し家に連れて帰った。ビニール袋に入ったままの鯉は座席のフックに掛けられ、私は水がこぼれないかどきどきしながら車の中で鯉を見ていた。こうしてやっと我が家に着いたのが「鯉太郎」だ。私はこれまでマンションに住んでいたこともあって生き物を飼ったことがなかった。人生初のペットだ。うれしい。私は張り切ってお世話をした。幅が1メートルもある水槽で金魚や魚を飼っている近所の方と知り合いだったので、その方に「師事」して飼い方を教えてもらった。父や母も「餌あげた?」「水が汚れてきたよ。」など鯉太郎を気にかけてくれるようになった。家の軒下で飼っていた鯉太郎は秋を越え、寒い冬を越え、少しずつ大きくなっていった。餌をあげるのも水槽の掃除をするのも、もうすっかり毎日の日課だった。そして翌年の夏、猛暑の日が続いた。鯉太郎の様子が気になって見てみると、なんと苦しそうに口をパクパクしていた。慌てて水を触ってみると暖かくなっていた。「どうしよう。」私は泣きながら、近所の師匠のところへ駆けていった。まずは水温を下げることに聞き、急いで帰り水槽に氷水を入れたりした。鯉太郎は少し元気を取り戻したが、その後動かなくなり死んでしまった。私はショックだった。悲しくて泣いた。庭の片隅に鯉太郎のお墓を作り、死なせてしまったことを心の中で鯉太郎に何回も謝った。

これが私にとって命というものを本当の意味で理解した初めての経験だった。命は尊く、はかないことを知った。これ以来、生き物を飼っていない。命というものの重さが私に生き物を飼うことを留めさせる。その時「師匠」から、40年ほど魚を飼っているがここ数年は夏の気温が上がりすぎて飼うのが難しくなっていると聞いた。それまで私は地球温暖化といわれても、「暑いのはいやだなあ。」ぐらいであったが、鯉太郎の死から地球温暖化の問題について調べたり、考えるようになった。このまま温暖化が続けば、人間だけでなく地球の将来が危ないということに気がついた。自分たちの世代でなんとかしなければならぬ。それから私は常に環境問題を意識して行動するよう心掛けるようになった。

この地球の全ての生物に命がある。人間だけが暮らしやすい地球などあり得ない。私たち人間が便利な社会を求めた結果、大量の二酸化炭素を排出し、温暖化を進めてしまった。それにより、巨大な台

風や豪雨といった異常気象が起こり、生物の生態系も乱してしまった。しかし、今私たちはこの問題に向かい始めている。パリ協定によって二酸化炭素の排出量が制限され、各国が二酸化炭素の排出量を抑える努力をしている。それにより企業の経営理念も持続可能な世界を創り出すことに貢献するという観点が生まれ、私たち消費者も持続可能な世界に考慮している企業の商品かどうかを購入するときの判断基準の一つとなっている。今、世界はコロナウイルスによって大きな危機に瀕している。コロナウイルスによって大切な命が奪われるだけでなく、貧困、教育格差、差別など様々な問題が浮き彫りになった。だが、困難な時代となっても地球環境問題に向き合うことをやめてはならない。地球環境問題を解決することが、私たちの未来を作ることになるからだ。そして私たちが抱える問題を総合的に解決する SDGs の実現を全力で目指さなければならない。それがあらゆる命を守ることになるからだ。大切なのは私たち一人一人の意識と行動なのだ。自分の選択、行動が多くの命にかかわることを決して忘れてはならない。